

誠の教え

西岡 幸子

私が武田学園に奉職したのは、昭和三十二年四月から、四年間でしたが、校長先生（武田ミキ先生のこと）とは、何十年も一緒にいたような気がします。最近はあまりお会いする機会もなかったのですが、何年会っていないくても、あの頃の思い出だけは、しっかりと私の心の中に宝物として、今でも生き続けています。昭和三十二年の大火災、私が学園に勤務してすぐの四月三十日お昼過ぎのことでした。

目の前で校舎が見るうちに焼失し、皆んな、茫然と佇むばかりでした。そんな時でも校長先生はくじける心に鞭打ちながら、先生方や生徒達を励まされていました。

昭和三十三年頃から、可部中島の土地（田畑）を整地され、新校舎、特別教室、体育館、運動場、寮などを次々と、わずかの間に建設されたこと、目を見張るように完成してゆきました。あの小さな体のどこに、こんな力があるのかしら、いつも思っていました。

あの頃私も寮生と共に生活して、校長先生とは、朝に夕に接し、よく指導していただいていたので、自然に溶け込んで行けたのだと、思います。

二、教育一途の人

昭和三十三年四月から、女専一年A組担任と洋裁教師の任命を受けました。私は責任の重さと、不安で、“どうしましょう”と少々悩みました。しかし校長先生の言葉の中の“為せば成る”を思い出しました。二十三才の春、初の教壇に立ち、“生徒と共に歩もう”と心にきめ、一步一步と歩んだ気がします。そして秋の各教科の作品展示会、初めて一年生和洋裁作品展示発表で、気も心も落着かず、胸もどきどきで、担当の先生方と夜おそくまで、生徒達の作品を、あっちにやったり、こっちにやったりして考えていたその時、突然校長先生が戸を開けて、ソット覗かれたことを、今も鮮明に思い出されます。あの頃は大変多忙で、学園再建に努力されていた時でした。朝早くから、夕方遅くまで職員室の校長先生の机に向われていたことを思い出します。

私ごとですが、昭和三十四年結婚し、三十五年十一月三日に、可部の病院で男子を出産した時のことです。初めての出産で、家庭の事情（母は神石で祖父と二人で暮し、主人とは別々の生活）によって一人で暮していましたので、校長先生が、不安だろうから寮に泊るようにと、気配りして下さったこと、出産間際には、校長先生、沖野先生（中前先生）、定木さん（大下さん）ら皆さんが病院の方に来て立ち合って下さったりで、がんばれ、がんばれと、夜中まで、そばで励まして下さり、無事男子を出産したこと、その時校長先生が、“これはよい子で、いい顔してる、一番にダッコしたかったが、一番はやっぱりとうちゃんにゆずらんと”この言葉を聞いて、ほんとにお母さんのように暖かで、ありがたさで胸いっぱいでした。その後三月末に退職するまで学園にいましたが、子守をしてもらえる人が見つからず、結局学園の近くに家を借り、朝、子供と一緒に出勤し、子供を校長室に寝かせてもらい、私は授業にという毎日でした。子供はおなががすくと、大きな声で泣き、むずかり、校長先生や大下さん（重間さん）や定木さん（大下さん）を、大変悩ませ、お世話をかけたことでした。ある時は、校長先生が“かあちゃんもうす

ぐるからね」と泣く子を、何度も何度も、あやして下さった姿を拝見し誠にありがたく、こんなにして下さったこと、生涯忘れることはできません。

退職して三十数年になりますが、時々お会いしていた頃、主人のこと、子供たちのことを、話したり聞いたたりし、帰りには「元気でまたおいでよ」と私達が帰るのを、淋しそうに送って下さり、いつまでも、いつまでも、手を振って下さっていた姿が目の前に浮かびます。

暖かで、優しく、つねに人を愛され、人を大切に思っ下さり、誠の女子教育者でした。こんな校長先生とお会い出来たことは、私の一生の宝で幸福に思います。

最後に長い間、暖かく、優しく見守っていて下さったことに対して、心より深く感謝し、お礼を申し上げご冥福をお祈りし、ありし日の思い出として綴りました。